

# 美術科教育学会通信 No.64

2007年3月1日発行

通信事務 代表：〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地  
鳴門教育大学芸術系（美術）講座 橋本泰幸研究室 / Tel. & Fax. 088-687-6481 / E-mail : hasimoto@naruto-u.ac.jp  
企画・編集：山木朝彦 / Tel. & Fax. 088-687-6485 / E-mail : yamaki@naruto-u.ac.jp  
編集レイアウト：山田芳明 / Tel. & Fax. 088-687-6636 / E-mail : yyamada@naruto-u.ac.jp  
企画協力：山田一美（東京学芸大学） WEB版：谷口幹也（九州女子大学）

## 学会活動から見える課題

代表理事 橋本泰幸（鳴門教育大学）

第29回美術科教育学会金沢大会開催まで、残すところ1ヶ月余りとなりました。大会準備は滞りなく進んでいると聞いております。また、昨年12月に行われた選挙により、新役員も決定し、新たな体制での出発を準備しているところです。以下に述べますことは、16年度以降に行った特記すべき学会活動の概略です。これにより学会が持つ課題の一端を明らかにし、今後の活動の一助になるとも考え、皆様にご報告いたします。

### ● 16年度（財）日本学会事務センターの破産

53号の通信で、学会を今まで以上に、研究の充実と発展の場にするをお約束いたしました。しかし、この約束を危うくする事件が、新執行部船出早々の平成16年8月に起きました。「(財)日本学会事務センター」の破産です。

学会事務センターは、各研究分野が持つ学会の事務を代行する組織で、1971年に設立された文部科学省所管の財団法人であることなどから、約270もの学会が事務を委託していました。美術科教育学会も、年会費の請求・納入と管理、学会誌や通信の発送など、事務の一部を委託してきました。センターの倒産は一語でいえば、ずさんな財政管理の結果でしたが、これにより、各学会が預けていた年会費の回収が不能になりました。当然、センターに対する訴訟、やがて和解に至るのですが、全額回収は不可能でした。幸い、我が学会は既に通信でお知らせしたように、少額の被害で済みました。しかし問題はそれで済んだわけではありません。

センター倒産によって、委託していた業務がそのまま新執行部・事務局のものとなりました。まず行ったことは、残額に基づく年度予算の作成、会員名簿の整理、会費納入口座の開設、同時にその通知の発送でした。あわせて、それまで学会誌関係費と別立てになっていた会計の一本化を図るなど、常に学会資金の収支を把握できる体制としました。これらの整理の中で明らか

かになったことは、会費未納者の数の多さでした。事務局では通信等発送の封書上に宛名と共に未納金額を記載することにしました。これによって、未納者が激減しました。

### ● 17年度 文部科学省への請願と音楽・美術共同によるシンポジウムの開催

中教審・初等中等教育分科会教育課程部会が学習指導要領の改訂を審議しているのですが、その審議の中で芸術教科の縮小、選択教科への移行が話題にされたことが、17年末明らかになりました。このことは芸術教育に携わる私たち教師や研究者に驚きと教科存亡の危機まで感じさせるもので、美術科教育学会では、早速代表理事名により通信59号でお知らせしたような請願書を、初等・中等教育局長、中央教育審議会議長、中教審教育課程部会長の各氏へ提出しました。あわせて、学校音楽教育実践学会と美術科教育学会共同による「緊急シンポジウム」を、東京・代々木の青少年総合センター国際会議場で開催しました。パネラーの一人として美術科教育学会から新井氏（群馬大学）が出席、コーディネータとして脳科学者小泉英明氏を招き行われました。小泉氏は「ローマ法王庁アカデミー」に招かれ「心・脳と教育」に関する講演をされるなど、この分野の権威でもあります。このシンポジウムでは芸術活動が如何に人間の成長発達に意味を持つかを、脳科学の観点から明快にお話しされました。このシンポジウムは抗議集会ではなく、芸術教育の意味や意義を考えることで開催され、注目されるシンポジウムでした。今後とも、芸術教育関連学会とのこのような会の継続が、学校教育に確かな基盤を形成する上で必要に考えます。

会員の皆様には以上のことを含めて、学会通信を通して学会の活動をお知らせしてきました。研究大会および東西地区研究会の件、学会誌への研究論文投稿の件、学会事業の件、文献紹介、そして理事会をはじめとする事務局の活動等々がその内容です。今この記事を書くために、その時々記録や通信やらを見ていますが、これらの活動に対して、その任に当たられた理事や委員の方々の多大なお力があつたことを痛感せざるを得ません。

特に、千葉大会や京都大会で運営委員を務められた長田謙一、石川誠、村田利裕の各氏、そして、この3月に開催される金沢大会での鷲山靖氏らのご尽力、また、東西地区研究会を企画運営してこられた宮脇理、花篤實の両氏と委員の方々、皆様に感謝申し上げます。

地区研究会はこの3年間に東西合わせて14回、列挙してみますと、東地区研究会は、福島大学、宇都宮大学、東京学芸大学、横浜トリエンナーレステーション、筑波大学、静岡大学、福島大学、西地区研究会は、岐阜大学、鳴門教育大学、信州大学、京都教育大学、サクラクレパスビル、奈良教育大学、堺市役所の各地で開催されました。

実に壮観ではありませんか。同時に、関係諸氏の並々ならぬご尽力を感じざるを得ません。本年度、静岡大学での東地区研究会、大阪堺市役所での西地区研究会に参加いたしましたが、

一方が美術教育にある「運動」に焦点を当て、美術教育の拡大を考え、他方は学校長ら現職教師、指導主事の方々を迎えて、学校美術教育の姿を事実の中に求めるというもので、それぞれに特色を持つ研究会でしたが、先に挙げた研究会も同様にそれぞれが特色を持って開催されてきました。

このような会の開催は、委員をはじめとする会員諸氏の熱意の賜であることに他なりません。その方々が、美術科教育学会のためにと考えられたのは当然でしょうが、真意は美術教育の理念や方法、学校教育として実現される美術教育の在り方—それは子ども、環境、社会とどのように関わり貢献できるかを考えることにもつながります—について、共に深めたいという美術教育研究そのものへの熱意の故だと思います。考えてみれば、この方々が持つ「真意」は私たち会員一人一人のものでもなければなりません。

限られた活動の概略ですが、お読みいただくことで、学会が研究の場として、同時にその研究成果を社会へ還元することを考える場であること、また、そのように活動を展開していることを知っていただき、今まで以上の学会活動への協力の必要性を感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、学会運営に当たり、副代表理事の増田金吾、永守基樹、福本謹一、事務局の山木朝彦、山田芳明、谷口幹也の各氏の尽力をご報告し、謝意といたします。なお、本誌において、3年間にわたる学会運営の成果と展望について、総務部、研究部、事業部ごとにまとめてありますので、こちらもお読みいただければ幸甚です。

## 第 29 回美術科教育学会 金沢大会【最終案内】

<http://www.ed.kanazawa-u.ac.jp/~washi/>

美術科教育学会 金沢大会事務局代表 鷺山 靖 (金沢大学)

第29回美術科教育学会金沢大会の日程・研究発表を決定いたしました。

78件の研究発表申込をいただき、大会二日目午後も開催する運びと相成りました。事務局一同、多くの発表申込に喜び勇み、金沢大会が参加者の研究交流・進展の契機となるよう準備を進めております。開催地金沢は小春日和が続き、山里では山菜が芽吹き始めました。大会参加と共に、金沢ならではの自然の恵み、庭園、そして各種の美術館と博物館もご満喫いただければ幸いです。

どうぞ会員諸氏お誘い合わせの上、金沢大会へお越しください。お待ち申し上げます。

■ 会期 平成19(2007)年3月25日(日)～26日(月)

■ 会場 金沢大学教育学部 所在地：石川県金沢市角間町 別紙の案内図参照

■ 大会テーマ 「美術教育研究の不易と流行」

■ 日程 詳細は別紙の研究発表等一覧を参照

3月25日(日)		3月26日(月)	
	9:00～12:30 新旧理事会	8:00～	受付開始
		9:00～11:55	研究発表
12:00～	● 受付開始 ●	11:55～13:00	昼食(北福利施設)
13:00～13:20	開会行事		
13:30～15:25	研究発表	13:00～15:55	研究発表
15:40～16:40	学術講演	16:05～17:00	学会総会
17:00～19:00	懇親会(北福利施設)		

■ 研究発表 78件 (以下、発表申込書の第1キーワードによる分類。数値：件数)

美術教育の実践 (17)

鑑賞教育 (15)

美術教育史 (10)

美術教育基礎論 (6)

造形遊び (4)

子どもの世界観 (4)

内容・教材論 (3)

その他 (19)

鑑賞教育の実践、鑑賞教育の方法論、鑑賞教育と美術館

教科書、教具、カリキュラム、教員養成・研修、制作学、電子メディア利用、数学、作家研究、生涯教育、評価論、美術館教育史、美術教育政策、芸術教育、地域連携、諸外国の美術教育、工作・工芸、自発的造形活動

## ■ 学術講演

講師 嶋崎丞（しまさき すすむ）氏

石川県立美術館長・石川県文化財保存修復工房所長・石川県七尾美術館長

演題 「加賀のものづくり」

百万石の加賀藩は文化政策を布くことによって、江戸幕府の時代を生き残りました。加賀藩前田家は多く名品を収集すると共に、多くの名工を招聘し、名工は名品を制作しました。その名品のいくつかを私たちは石川県立美術館などで鑑賞することができます。

名工が念じた「ものづくり」の心や意味、それが<かたち>となった逸品に接する時、私たちは、どのように感応するのでしょうか。嶋崎氏の講話によって、私たちの研究テーマの源である<あらかわすこと>を再考する機縁を得たい。

## ■ 参加申し込み方法 事前申込、当日申込のいずれかの方法でお申し込み下さい。

### <事前申込>

---

※懇親会に参加される方は、事前申込をご協力願います。

通信No.62同封の「郵便振替払込票」にて、参加費・懇親会費の払い込み願います。

参加費は5000円、懇親会費は4000円（学割2500円）です。

- ・口座番号：00780-2-94067（右詰） ・口座加入者：美術科教育学会金沢大会事務局
- ・通信欄：振込金額内訳口にレ印を、所属、住所、氏名（フリガナ）をご記入下さい。
- ・事前申込 郵便振替払込の期限：3月15日（木）まで

### <当日申込>

---

参加当日、受付にて参加費・懇親会費の納金を承ります。

## ■ 情報交換の場

ご希望の方は3月20日までに金沢大会事務局へご相談下さい。

法人は有料とさせていただきます。

## ■ 宿泊等 事務局では扱いません。大学生協による宿泊申込を紹介します。

大学生協宿泊申込は、通信No.62同封の別紙案内書をご覧ください。

<http://www.ed.kanazawa-u.ac.jp/~washi/> でもご覧になれます。

## ■ 連絡・問合せ先

金沢大会事務局 担当 鷺山靖

E-mail [washi@ed.kanazawa-u.ac.jp](mailto:washi@ed.kanazawa-u.ac.jp)

TEL 076-264-5584

※ 電話による連絡・お問い合わせはできる限りご遠慮ください。



# 総務部の成果と展望

副代表理事 増田金吾（東京学芸大学）

## 1. 成果

総務部の統括担当者として、3年間の締めくくりを以下に書かせて頂きます。

総務部・研究部・事業部の設立は、平成16年8月に行われた第1回美術科教育学会理事会において承認されました。これは、橋本泰幸代表理事を中心に3名の副代表理事により、懸案であった学会の規約改正原案が検討された結果によるものです。

三部は、代表理事の統率の下で機能するものですが、総務部はその中でも、最も代表理事や事務局に密接に係わる部です。そのため、学会誌編集を主な仕事とする研究部などとは異なり、「総務」単独の仕事、と明確化できない性格を持っています。従って、ここで総務部の成果などと書くことはおこがましいのですが、学会通信の企画・編集担当の山木朝彦事務局長の命（すなわち代表理事の命）によりここに記すことを申し添えます。

### (1) 定例的な仕事

- ①会計関係事務—予算案作成，会費徴収，予算執行，会計監査依頼，会計報告
- ②会員名簿管理—会員の入会受付，理事会承認，名簿管理

これは、総務としての最も基本的な仕事です。しかし、これを毎年度きちんと行うことはなかなかたいへんで、この部分がきちんと機能していないと学会は動きません。財団法人・日本学会事務センター（以下、事務センターと略す）が破産したのも、①の部分がずさんであったからです。こうしたことの実際的な部分を、鳴門教育大学学会事務局の山田芳明・谷口幹也両氏が担当して下さいました。

### (2) 各年度の主なことから

平成16（2004）年度

- ①学会規約改正
- ②事務センターの破産に対する対応

平成17年度

- ①学会費滞納者問題の対応について—8月の理事会で慎重審議の結果、原則として2年度分を滞納した者は退会とするという方針を確認

平成18年度

- ①学会役員改選選挙について—一次期役員を選出するため本件について検討し、選挙管理委員長を選出。また、選出規程について、代表理事を中心に検討を重ねていくこと、としました。

## 2. 展望

総務部としては、代表理事を助け、他の理事や事務局員、更には会員諸氏の協力を仰ぎつつ、基本的な「定例的な仕事」を確実にを行うことが最も重要な仕事です。次に、やはり代表理事を補佐しつつ時代の変化に敏感に対応し、行動していくこと、こうしたことに尽きると考えます。

# 研究部の成果とこれからの課題

研究部担当副代表理事（学会誌編集委員長兼務） 永守基樹（和歌山大学）

3年間の任期も残すところ僅かとなりました。会員の皆さま、特に学会誌にご投稿、ご執筆頂いた方々に感謝しつつ、為しえたことの少なさと課題の多さをあらためて感じています。3年前に設定した研究部（学会誌編集委員会を含む）の事業の柱は以下の3点でした。1) 学会誌リニューアル、2) 研究発表関係諸規定の見直しと整備、3) 実践研究プロジェクト。この3つを中心に、その他の事項と合わせて成果と課題を示したいと思います。

## 1. 学会誌リニューアル

2006年3月発行の第27号より、学会誌のエディトリアルデザインを大きく変えました。他学会誌との差異化を図り、B5版を踏襲しつつも2段組、装丁には単行本のテイストを加味したデザインとなっています。

## 2. 研究発表関係諸規定の見直しと整備

今期の学会規定変更に合わせて、学会誌や大会での発表に関する規定の整備を行いました。具体的には、「編集・査読規定」、「投稿案内」、「投稿原稿作成要領」、「入稿原稿作成要領」、「口頭発表規定」、「『美術教育学』賞規定」など、規定と申し合わせの作成と整備を行いました。「編集・査読規定」に基づいて「投稿案内」や投稿・入稿の要領が年度毎に示され投稿が呼びかけられます。「口頭発表規定」も以上にもなまって改訂されました。公正で開かれた研究の場を整備し、研究の発展に資することを目指しました。

## 3. 実践研究プロジェクト

美術教育学の大きな課題である教育実践に基づく研究のあり方について、その課題を整理するとともに、実践的研究の質的向上と発展を目指して、ガイドラインの作成をも視野に入れた学会としての提言をまとめることを目的として立ち上げられました。現在、提言をとりまとめ作業中です。

## 4. その他

研究部会活動支援や『美術教育学』賞の運営、InSEA 関連国際会議の科研費申請などについて活動を行いました。詳述は他の機会に譲ります。

## 5. 今後の課題

残された課題は多くありますが、ここでは学会誌に関することを数点挙げます。第一は査読体制の改善に関して。現在の査読体制は多くの方のボランティアなど尽力で成立していますが、今後はより一層査読の精度を上げ、査読が投稿者の研究の質的向上につながり、投稿者と査読者の双方が納得にできる査読体制が求められています。第二に「レビュー論文」のあり方です。これも毎回の執筆ご担当者の多大な努力で継続されていますが、このレビュー活動と学会研究活動の関係性を、より目に見えるかたちにしていく努力が必要だと感じています。学会賞のあり方とリンクしつつ今後のあり方が検討されるべきでしょう。実践研究の振興と質的向上や英文論文、英文学会誌の刊行も以前からの課題です。

# 事業部の3年間の総括と今後の課題

事業部担当副代表理事

福本謹一（兵庫教育大学）

事業部が担当した主な事業は、以下の2点に集約できます。一つは、東西地区研究会の継続的な開催であり、一つは2008年夏のInSEA世界大会への共催団体としての協力です。

## 1. 東西地区研究会の開催

例年東西両地区とも3回～4回の研究会を開催してきました。この地区会は、東地区を宮脇理事が、西地区を花篤実理事が総括するものであり、お二人のご尽力には頭が下がる思いです。事業部を担当させていただいた3年間に開催された地区会のタイトルは以下の通りです。

開催年月	地区	テーマ	開催場所	担当会員氏名
平成16年度	6/26 東	「美術教育が育む確かな学力」	福島大学教育学部	天形健
	8/21 東	「アーカイブ化時代の美術教育」	宇都宮大学教育学部	山口喜雄
	12/25 東	「美術教育を取り巻くキーワードと実践的課題」	東京学芸大学	山田一美
	8/17 西	「鑑賞力・美術批評力の育成～国際美術教育シンポジウム」(トム・アンダーソン)	岐阜大学	辻泰秀
	12/4 西	「こらからの観賞教育～美術教育を身近にするための学校と美術館ができること」	京都国立美術館	石川誠
	1/29 西	「今なぜ造形教育なのか～トントンゴゴゴ図工の時間から見えてくる図工の学び～」	鳴門教育大学附属小学校	山田芳明
平成17年度	6/25 東	「長野で考える美術教育」	信濃教育会大講堂	橋本光明・岡田匡史
	11/27 東	「越境するアート、変容する鑑賞の現在」	横浜トリエンナーレステーション	相田隆司
	1/28 東	「今、始まるアートライティングの教育」	つくば国際会議場	直江俊雄
	11/12 西	「変革期における美術教育」	京都教育大学	村田
	1/14 西	「山本鼎と美術教育」	サクラアートミュージアム	金子一夫
2/26 西	「国際交流を通して美術教育の今を世界に発信しよう」	兵庫県立美術館	福本謹一	
平成18年度	7/22 東	「『連携と創造』に基づく美術教育の可能性」	静岡大学教育学部	芳賀正之
	10/7 東	「地域文化と現代美術」	福島文化センター	渡辺晃一
	12/25 東	「つくる活動と創造的仕事のゆくえ」	東京学芸大学	山田一美
	3/11 東	「アートライティング教育の意義と可能性」	筑波大学総合交流会館	直江俊雄
	12/23 西	「30歳目前の造形遊びを磨く～造形遊び続編～」	大阪教育大学天王寺分校	宇田秀士
	2/4 西	「サイカイSTYLEの美術教育」	堺市役所	岩崎由起夫
2/17 西	「3DCG体験ワークショップ」	三重大学教育学部	上山浩	



この地区研究会を継続発展していくことが望ましいと考えていますが、テーマによって集客力にばらつきがあることや、地区研究会そのものが会員確保につながっているかどうかは不明確です。しかし、美術教育の低迷期にあつて会員確保はもとよりのこと、他の学会との連携や現場との接点を深めていき、社会的なアピールにつながるようなより戦略的な取り組みが必要であり、総体的な検討が必要です。

## 2. InSEA（国際美術教育学会）世界大会 in 大阪への取り組み

2008年夏に第32回 InSEA 世界大会が大阪で開催される予定ですが、美術科教育学会では InSEA という美術教育に関わる唯一の国際的な団体への協力の重要性を認識して、早くから共催団体として財政的な支援も行うことを表明してきました。JNTO（国際観光振興機構）を通して寄付金の納付を開催年まで継続して行うことになっていきますし、研究計画に関わるサポートについても研究部等で考えることになろう。事業部としては、国際学会開催を含めた研究成果の発表に関わる科研費申請を済ませているが、この科研費取得は困難であるという予測をしています。実質的な支援として、研究部、国際交流部会との連携を図りながら各種研究企画を立てる必要があるでしょう。昨年ユネスコの芸術教育会議では、芸術教育が学校教育での周辺的な扱いをされやすいことは共通しているものの、国際競争力の維持という視点から前向きな取り組みが特にアジア地域で見られることがうかがえます。そうした意味でも、InSEA への協力体制を、内外に日本の美術教育が目指す姿を明示し、ささやかでも美術教育分野における国際的な貢献を行うことは、我が国の「教育再生」を美術教育を通して図る方途を探る上でも重要だと考えられます。

### ◆新入会員の紹介

戸田 幸司（堺市立三宝小学校）、廣畑 浩（岡山県立美術館）、橋本 時浩（筑波大学附属聾学校）、高橋 花子（川崎市立中野島中学校）、渥美 廣剛（愛川町立愛川中学校）、長井 理佐（東京女子体育大学）、廣川 豪（福島大学大鳥中学校）

【平成19年2月14日までに手続き完了】



ます。しかし、文化を階層的にみるならば、クラブ・カルチャーはまだ大衆文化にも成りきれず、アンダーグラウンド的な様相が色濃いようです。このように、一般的に「芸術」と認識されるにはほど遠い表現でも、その現場では独創的な実験がなされており、この新しい表現の誕生に立ち会うことが、クラブにおけるV J活動の実践研究として意義あるものと私は感じていました。

その後、V Jの活動を芸術の領域として捉える試みは、意外なところで始まることとなります。バウハウスの遺産を継承するドイツ、ヴァイマルのバウハウス大学でV Jがプロジェクト化され、2004年夏、ヨーロッパ地区「V Jフェスティバル」としてのイベント実施によって、V J表現の芸術における位置づけが試みられたのです。私の研究活動での「バウハウスからV Jまで」の経緯が、ここに偶然の一致をみたのです。

次に、私の研究の地域との関わりを研究会活動からみることにします。昨今は、大学における研究の地域貢献ということも重要な課題となってきています。私は、以前から岩手県の産学官連携によるINS（岩手ネットワークシステム）の傘下にある「マルチメディア研究会」に所属し、研究交流やイベント実施に関わってきました。2005年7月、この研究会は私も運営幹事の一人となって「アート&テクノロジー研究会」に改組され、現在に至っています。ここでは定期的な研究会の他にデジタル作品コンテスト「アート&テクノロジー東北」も実施します。2005年11月の審査発表会&交流会では、学生を含む地域のV Jたちのセッションを特別プログラムとして企画し、V Jパフォーマンスを実演しました。この際、私は5年以上続けたV J活動についての「脱クラブV J宣言」をして、地域のクラブシーンでのV J活動はこの若い世代に受け渡し、私自身は「メディアアート」的な展開を試みることにしました。

翌年、2006年の春に盛岡市子ども科学館のプラネタリウム室（サイエンスドーム）の多目的活用の研究課題に関わり、岩手大学の関係部局と子ども科学館のスタッフを集め、私が代表となって「サイエンスドーム研究会」を立ち上げました。表現・画像処理技術・ネットワークの観点からそれぞれの専門家がイベント企画の構想に参画して、「プラネタリウムV Jイベント」を同年12月に実施することにしました。（その間、11月には盛岡市と岩手大学の間での共同研究契約を正式に締結している。）これは、子ども科学館の職員が操作するプラネタリウムの投影システムと、私のV J映像とのコラボレーションであり、メディアアートとしてのV J表現を試みるものともなりました。ここで使用される音楽も私が制作担当し、イベントの際には、さらにノイズのような音を入れ込んだ「サウンドスケープ」を別の担当者が演出しました。このV Jイベントは全国初の試みとして地元のメディアで報道されるとともに、ネット上の関連コミュニティでも話題となりました。

今後も、バウハウスを精神的な源泉として、今、そして未来に向かった研究・表現・教育の活動を進めていきたいと思えます。遠回りをしつつも、将来的には美術教育研究につながりがもてれば幸いです。

#### 関連 Web ページ：

アート&テクノロジー東北 2007：<http://www-cg.cis.iwate-u.ac.jp/AT2007/>（制作：本村）

プラネタリウムV Jイベント：<http://kenta.edu.iwate-u.ac.jp/dome/>

本村健太（岩手大学）表現・研究・教育：<http://kenta.edu.iwate-u.ac.jp>

自作音楽を中心にした国内外との情報交流：<http://www.myspace.com/drkenta>





が起因した問題です。このような、出産の前後をつなぐ「周産期医療」については、現在、医学の世界でも徐々に見直されてきていますが、細分化された知の領域内の研究に比して領域間をつなぐ部分が不備であるというのは教育の世界でも同様ではないでしょうか。例えば「総合的な学習」などはその回復を企図したものだったはずです。自分も当時、美術の授業が閉じられた中で完結するのではなく、開かれた構造において刺激を受け取ったり表現が社会へ向けて発信されるような「つながり」を求めていましたから、様々な分野における問題が一つの理念に集約されてくるような感覚を覚えました。

一方、日頃の授業では、感動を伴った造形活動の演出と共に、子ども達の「感じ方」や「構え」に関心を抱いており、いつどのように「美しい」と感じたり芸術的な面白さを認識するのか。そして、自分のよさを自覚しつつ前向きに美術に向き合う態度を育成するためにはどうすればよいのか。様々な授業の組み立てやしかけを考えていました。そのような折に「つながり」という考え方は、日常に追われ偏狭になっていた視野を広げ、新たな実践を生み出すきっかけになりました。他教科とのつながりから地域や社会的なつながりへと新たな発想が相乗的に湧き出してきて、原田真二氏や井上堯之氏らミュージシャンとのコラボレーションなど大きな潮流へも発展していったのです。また、「つながり」の時系列としての意味は、子どもが背負う歴史的な文脈へも私の視線を誘いました。何をどのように感じるかは、その子ども独自の経験に基づいた資質でもあるわけで、そのような個々の子どもの持つ歴史性、いわば一人一人の「物語」と照らし合わせながら表現を読み取る必要性に気づかされました。

現在勤務する新潟大学の芸術環境講座では、地域と連携した「うちの de アート」等、国内外のアーティストを招聘しながら学生主体でプロジェクトが実践されており、今年は新潟西区全域へと拡大しつつあります。私自身は、その他に小中学校や児童館等へ出向いての「出前ワークショップ」や、毎年浜辺に数万人の市民を集めて開催されている「日本海夕日コンサート」の実行委員に参加しランドアートを企画する等、新潟の地域性を生かしたアートプロジェクトを展開しています。そのような中、最も力を入れて取り組んでいるのはやはり大学の講義で、教員養成を目的としたものばかりでなく、全学部対象の教養講座においても美術教育の意義をあらゆる学生に知ってもらうべく「生命論パラダイムからの美術教育」と銘打って臨んでいます。人間にとって美術の学びはいかに必要不可欠なものであるか、全ての人々に理解してもらえるようなアプローチが今の自分の課題です。

さて、かなり大まかにではありますが自分の美術教師としての歩みを辿ってきました。改めて振り返ると、忘れかけていた出来事や当時の取り組みが思い出され、ある意味で自分が意識していなかった別立ての「物語」が紡ぎ出されてくるようにも感じます。美術教育に関わる教師一人一人の「物語」。これも現在関心を抱いていることの一つです。



### 事務局移転に伴う学会費振込口座の変更について【重要】

2007年3月末日をもって、鳴門教育大学の事務局（山木朝彦・山田芳明）は、すべての学会事務にかかわる仕事を終了いたします。

2007年4月1日から（すなわち2007[平成19]年度から）は、すでに美術科教育学会代表理事として選出され、総会にて承認される予定の、ふじえみつる先生が所属される愛知教育大学内に事務局が設置される予定です。

これに伴いまして、事務局の重要な役割であった会費の管理にかかわる仕事も、鳴門教育大学から愛知教育大学に移行します。

したがって、学会費納入先の郵便局振込先口座が2007年4月1日をもって下記の口座に変更します。この日を境にする会費納入はすべて、新口座となりますので、十分、ご注意ください。

2007年4月1日以降

**郵便振替の口座番号と加入者名です。**

**口座記号番号 0800-3- 81908**  
**加入者名 美術科教育学会本部事務局**

なお、2006年度までの会費につきましては、至急、下記の口座に振り込んでください。

口座記号番号 01610-9-111229 加入者名 美術科教育学会

.....

学会通信編集後記

2004年11月1日発行の「美術科教育学会通信」No. 54から、2007年3月発行予定の本誌No. 64まで、足掛け4年間10号分の編集を担当してきました。53号までの研究情報の交換という機能を継続・発展しつつ、どのようにしたら学会運営の要である理事会や総務・研究・事業各部の仕事を今まで以上に会員に周知できるかということが、編集を行う際に、私が自分に課した課題でした。この課題と向かいあい、数多くの理事の先生方、大会実行委員長の先生方、そして、副代表理事の増田金吾先生、福本謹一先生、永守基樹先生にメールや電話での原稿依頼をさせていただきました。過酷な業務に従事されているさなかにもかかわらず、締め切りのある原稿依頼を快く受けいただき、ご玉稿を賜りましたこと、この場を借りて心より御礼申し上げます。最後に、巻頭の辞をいつも快くお書きくださった学会代表理事の橋本泰幸に感謝申し上げるとともに、レイアウトの過程で、チャーミングな題字で本誌を飾っていただいたうえに、印刷屋さんへの原稿入稿までしていただいた山田芳明先生に御礼申し上げます。

山木朝彦(鳴門教育大学)